

X-37

4238

135  
4  
5/4

新作演劇脚本

河黙阿弥作  
油坊主闇夜墨衣

版權  
興行權  
所有

東京壽永堂出版

千歳座戊子ノ第三回興行



088390-000-3

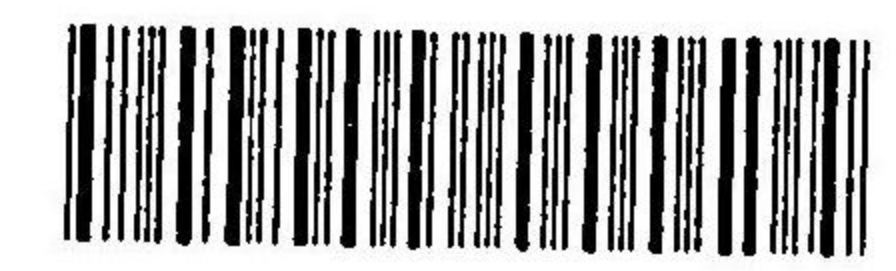
特52-611

油坊主闇夜墨衣

河竹 黙阿弥 (吉村 新七) 著

M21

DBJ-0016





X-37

4238

135

4

5/4

新作演劇脚本

古河黙阿弥作

油坊主闇夜墨衣

千歳座戊子ノ第三回興行

版権  
興行権

所有

東京壽永堂出版



特52  
611

- |   |                        |      |
|---|------------------------|------|
| 一 | 油坊主曾玄賀ハ偽義親法師<br>甲賀三郎義澄 | 門十郎  |
| 一 | 陸奥四郎為義                 | 左四郎次 |
| 一 | 義澄共家共小島之助              | 金太郎  |
| 一 | 平氏の侍須の股連藤太             | 門藏   |
| 一 | 兵卒                     | 門兵衛  |
| 一 | 同                      | 左伊次  |
| 一 | 同                      | 東三郎  |
| 一 | 同                      | 小藏   |
| 一 | 平の忠盛                   | 菊五郎  |
| 一 | 侍女撫子                   | 歌女之丞 |

祇園社だんまりの場

吉村新七著作



本舞臺一面の半舞臺正面瓦葺附き白木の廻廊上下樹木の張物て兵切都而京都祇園の社  
外廻りの休火不運藤太侍烏帽子半素袍股の附太刀馬手さ草履よて立身下手よ兵卒四人  
手廻り附一本さしわらじよて扣へ居る此見得時の太鼓よを懸明く  
(運藤太)先年謀叛のきざよわけて出雲の國へ罪となりし源家の一族義親事更よ悔悟の  
やうすあく又もやよりく味方を集め討て出ん隠謀謀れ勅命うけて正盛どの討手よ向ひ  
義親よ一味の者を討とりて平定よ及びしが心得御さひ先給てより義親法蘭ど名乗るもの  
北陸道を徘徊なま愚民を一味よめたらひて當の敵正盛どの忠盛どを視ふよしるれ也  
を密かに詮議せよと命うけし運藤太(○)今義家殿の養子となりし陸奥四郎義成は其  
義親の養子也(△)勅命ありとゆせども實父を討を恨み思ひ正盛殿御父子をば(□)  
折かならば同らんと笑みの内よ刀を隠し時節を待つて居るとやら(△)内裏守護の御  
役目も常より落平儀執られは始終は乱々ありませう(運)何れ兎も恐れ愚民をよとばす  
偽義親の在家を尋ねあらめ捕て烏帽子掛けさいだつ人氣をしづたよやあらぬ(○)うれよ  
つめて種々さつた下くは者評議なす(△)東の方から西へ飛た世よもまれなる  
光りもの(□)夫よ又祇園の社へ怪しき坊主が出るよし(△)もしや義親を企る偽義親よ落  
遣の者(運)いかよも汝が申如く由緒のあらぬ此世の中今宵樹木の蔭よ隠れぬからし捕  
る手柄になさん(○)左様なれば(四人)運藤太さま(運)何れも参れト時の太鼓よて運藤

太四人上中へ遣入る三腔入り高拍子に成り向ふより扇小島之助烏帽子半素袍大小草履  
よて出て來り花道よて(小島之助)入梅中どのいひなぐら兎角は暗れぬ日和ぐせ七ッ過よ  
り雲立花空も一面曇りしから今宵も雨よあるでわらう瀟るといふも由緒ゆる戀もへ上  
あき我君を祇園の邊へ忍びの御入り供奉の平の忠盛殿今宵を殺さく入らせられる其先  
み女御さまへ内命うけて密の御使ひあらぬ内よ急ひて参らうト舞臺へ來る此時上手よ  
り侍女撫子文金烏田振り袖侍女の拵らへ京草履よて被衣を冠り出て來り兩人舞臺にて行  
合左右へ除る事あつて撫子をききのけ上手へ行をととる(小)火急の用事て参る者何ゆへ  
あつて止められしぞ(撫子)暫しおまち下さりませ(小)や左いふ壁の(撫)撫子てムリ升  
るトウつぎをさる小島之助見て(小)最早黄背てムるのよ供をも逃す唯一人何れへ御出  
あさるのだ(撫)いつも上さまの御入りよの御先觸がムリ升のよけふは御沙汰ムリ升  
せねば女御さまよと前取のら殊の外にお待かねそれよ忠道私に遠見よ参ましたわいな  
(小)それの御苦勞千方てムつた御忍びの御同勢あて忠盛殿が御供をし給あくあれへ人  
らせられ升る則ち拙者御先觸よ只今参りてムリ升るかよひ所でお目よ掛りました(撫)誠  
よ能い所ろてムりましたいなト撫子嬉しき思入(小)御待兼をムリ升ればすあしと早く  
女御さまへ程なく入らせ升るを何卒おしらせ下されいなト爰へ上手より侍女四人出て  
來り(○)撫子さま(四人)御上が升る(撫)又お待兼よ御沙汰あらん編さへ御上の事委







忠盛の拵らへ弓矢を持走り出て花道より止り向ふをきつと見て(忠盛)時しを早月よ  
 降りゆく霖雨よくらき木下閣立つらねたる燈籠の木の間に光る灯し火よ見れば頭よ白銀  
 針をうへたる如くなる怪しき出立此人影ハ人間まてはよもあるまじく一ト矢よ射留よ  
 と嚴命うけれぞこれまさ狐狸の類ひの什業あらん篤と質性見届けて命をきつと選  
 らじ木蔭よ忍び生とりてその正体を顯はしくれん「空居をさして来る道も風よ燈  
 火吹消て閑路いといものすおしト忠盛舞臺へ来る風は音よ成り燈籠の灯り消へくら  
 き思入めて忠盛行あやむ本筋鐘を打込し杉の木蔭より雷玄出と来る忠盛伺ひながら前へ  
 立雷玄身をかゝしそ下手へ行忠盛ツカくど行路をどつて引もどし立廻りあつて雷玄  
 わらをとるきつと見得此時上手右宮の戸をこはし爲義棒茶筌直垂附太刀馬手ざし好  
 もの拵らへよて此中へ這入り一寸立廻つて三人きつと見得是より詠らへの鳴物よ成り弓  
 を遣ひ三人だんまりの立廻り此内しらせなし道具蛇の目廻しよ廻し杉林の燈籠を正面  
 よ見たる道具よき程よ三人抜き合せ立廻り此時本雨のさしく降り雨中の立廻りよろし  
 く此時だんく瓦斯の灯りをくらくなし三人とを刀の光りを當よ立廻りトとまつくらよ  
 なる此とたんとろくはげしき音しそ西より東へ詠への光りものを引とる此雷氣よて  
 舞臺一面よくつと明るくなりあれに三人顔見合せ双方へよあれ雷玄上手よ刀をうり  
 き中に忠盛刀をさし附下手よ爲義刀をのまへきつと見得あれを木のかしら三人引ぱり此

見得よろしくどろくカチニにて拍子幕

明治二十一年九月卅日印刷  
 明治二十一年十月二日出版

(定價五錢)

著者 吉村新七

本所區南二葉町三十一番地

發行者 齋藤長吉

日本橋區蛸燈町一丁目三番地

賣捌所 吉村系

本所區南二葉町三十一番地

印刷者 町田宗七

日本橋區新右衛門町十番地

